

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00256

研究課題名（和文）ネパールの村落における社会関与型アートプロジェクトと芸術教育

研究課題名（英文）Socially Engaged Art Project and Art Education in a Village of Nepal

研究代表者

金田 卓也（KANEDA, Takuya）

大妻女子大学・家政学部・教授

研究者番号：90265562

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はネパールの山村において自然素材を活用した「社会関与型アート」プロジェクトを实践し、アートを通じた持続可能な村落開発の可能性を探ることである。ムラバリ村における現地調査により竹を用いた集会所の建設、天然の土による壁画、ウコン染め、ランドアートとしてのアボカド植樹、伝統的金属工芸技術によるコイン制作などさまざまなアート活動を通して村全体を活性化していく可能性を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、美術館やギャラリーもない、アートという概念さえ存在しない地域で自然や暮らしに根差したアート本来の姿を再生する試みとして大きな意義を持つ。2023年秋には古河街角美術館における「境界を超えるアート」という企画展でムラバリ村で制作されたハート・コインや村の女性たちの手によるウコン染めの布などを展示し、実施したアートプロジェクトの一部を紹介することができた。ネパールの村でのアートプロジェクトを地方の美術館とつなぐことは生活に根差したアート本来の意義を再認識できる貴重な機会となった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the possibility of sustainable village development through art by implementing a "socially engaged art" project utilizing natural materials in a mountain village in Nepal. The field survey in Mulabari village revealed the potential of revitalizing the entire village through various art activities, such as the construction of a community hall using bamboo, murals using natural soil, turmeric dyeing, avocado tree planting as land art, and coin production using traditional metalwork techniques.

研究分野：芸術教育

キーワード：社会関与型アートプロジェクト 自然素材 持続可能な発展 ネパール 芸術教育 村落開発 発展途上国

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

「現代アート」の分野でアートの社会的な機能に着目した活動は「社会関与型アート」(Socially Engaged Art) と呼ばれ、近年、国内でも地域の発展とアートを結び付けたさまざまな活動が行われるようになってきている。本研究では、美術館やギャラリーもないネパールの村落地域で「社会関与型アート」プロジェクトの実践を試み、持続可能な発展につながる「社会関与型アート」プロジェクトの可能性を探る。ネパールのような発展途上国の村落地域においては現代的な意味における<アート>という概念が存在しているわけではない。しかし、村の日常生活の中には伝統的なもの作りや宗教儀礼と結びついたさまざまな造形文化が存在している。調査対象地は発展途上国ネパールのヒマラヤ山脈の麓に位置するムラバリ村である。この村は2015年のネパール大地震の震源に近く甚大な被害を受け、現在も現金収入減がきわめて限られているこの村の男性の多くは海外での出稼ぎを余儀なくされており、持続可能な発展に向けての支援を必要としている。本研究は「現代アート」における最先端の動向を「現代アート」という言葉から最も遠く離れた場所でも実践し、<アート>の本来の意味を問い直すことによって生活の中に根差している造形文化を掘り起こし、村の持続可能な発展につながるという画期的な試みである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、発展途上国であるネパールの山村において継続中の自然素材を活用した「社会関与型アート」プロジェクトを発展させ、そのプロセスを芸術実践および芸術教育の視点から考察し、社会的意義を明らかにし、持続可能な村落開発につながる「社会関与型アート」プロジェクトのモデルを提示することである。

3. 研究の方法

本研究の方法論は実践者と研究者という2つの立場から「社会関与型アート」プロジェクトの内容を発展させるというアクションリサーチであり、まず村で入手可能な自然素材と現存する土着的な技術について調査を行う。その上で集会所の建設、壁画制作、染色、果樹植樹、伝統的金属材料を生かしたコインの制作等さまざまなアートプロジェクトを子どもたちも含めた村人と共に実践し、そのプロセスを参加の様子も含めて記録する。そこで制作されたものを日本でも展示し、アート作品としての価値を再認識すると共に展覧会の成果を村に還元させる。

4. 研究成果

2023年4月にムラバリ村において現地調査を行い、継続してきたアートプロジェクトの進捗状況を確認することができた。この村ではコロナ禍の中も現地コーディネーターの協力のもとにアートプロジェクトを継続し、さまざまなアート活動が実践されてきた。

村の周囲に自生している自然素材である竹を活用した集会所内部と外壁には壁画が描かれるようになり、この集会所は共同体のアート活動の拠点となっている。外壁の壁画は村の子どもたちとジュネーブのインターナショナル・スクールの生徒たちとのインターネットを介してのイメージ共有による共同制作である。また、この壁画共同制作はイタリアの代表的現代美術家ミケランジェロ・ピストレットの「第3の楽園」プロジェクトと関連付けて行われ、自然との共存により持続可能な発展を目指すというコンセプトを共有することができた。集会所の壁画には「第3の楽園」の異なる2つの価値観の調和のとれた世界をシンボライズした3つの連続した円が表現された。壁画以外にも、竹を使った「第3の楽園」のシンボルも作られている。

美術館やギャラリーへのアクセスのないムラバリ村の人たちにとっては現代美術の動向は無縁のように見えるが、祭りなどを通して伝統的宗教儀礼に用いられるビジュアル・シンボルに慣れ親しんでいるために子どもたちも含めて村人は「第3の楽園」のコンセプトを十分に理解しているように思われる。スイスの学校の生徒たちとの共同制作はSNSのひとつであるMessengerを通して制作プロセスの写真の交換によって進められ、遠く離れた地域であってもアートを通じた交流の可能性というものを示してくれた。また、この壁画制作はスイスの生徒たちの発展途上国の状況に対する関心を高める結果となり、生徒たちによってムラバリ村への支援活動が自主的に始められた。その募金がムラバリ村に送られ、それをもとにアボカドの苗を購入することができた。

集会所以外の民家の壁にも村周辺で入手できる白・黄・赤・黒といった異なる色彩の土を描画材とした壁画も描かれた。ムラバリ村では民家の壁に壁画を描く習慣はなかったが、同じネパールにおいてもタライ平原の先住民であるタルー族には土壁にレリーフを作る習慣があり、ミティラー地方ではカラフルな壁画を描くことで知られている。土着の美術文化というものも固定的なものではなく、常に他地域との交流により変化発展してきた。その意味でムラバリ村の天然の土を用いた壁画が新たな美術文化の契機になる可能性がある。

村で栽培されているウコンを利用した自然染色も定着してきており、女性たちの手によるウコン染めの布を用いたショール作りも始まり、数少ない現金収入の道となる可能性が見出された。絞り染めなど染色デザインのバリエーションも増えてきているが、色落ちしないための工夫など作られたものの質の向上が目下の課題である。また、ウコンによる黄色以外の自然染色として自生するクワの実による染色も試みられている。

ムラバリ村の裏手に広がる荒廃した土地にアボカドやミカンなどの果樹を植え、それ自体を

ひとつのランドアートとする計画も着実に進んでいる。アボカドは斜面に大きなハート形になるように植樹されているが、背の低い苗が放し飼いのヤギに食べられないようにするための囲いが必要であり、その囲いのデザインもアートプロジェクトの一部になるような工夫も試みられている。アートプロジェクトの一環としてのアボカド植樹は「社会彫刻」という概念を主張し、「社会関与型アート」の先駆者であるドイツの現代美術家ヨーゼフ・ボイスの『7000本の樹の木』(1982)というプロジェクトに触発されたものであるが、最初に植樹されたアボカドの苗は美味しい果実を村人に供給できるまで大きく成長している。アボカドの収穫量が増加すれば、現金収入の道を開くことになり、アートプロジェクトに対しての村人のモチベーションも高まっている。

ジュネーブの学校との共同制作を指導したスイスのアーティストとの発案より、ハート型のアボカドをハートの形に植えるというランドアートにちなんでムラバリ村の鍛冶職人による伝統的金属工芸技術を生かしてハートをデザインしたコインも作られた。このシンボリックなコインはムラバリ村の持続可能な発展に貢献した者に贈られることになっている。「第三のパラダイス」とのコラボレーションについては2021年6月にスペイン・バルセロナにあるエスプロンセダ芸術文化研究所主催の「持続可能な村のための現代美術」と題されたウェビナーで紹介することができた。

このコイン制作は廃れつつある鍛冶職人の技術をひとつのアートとして再評価するだけではなく、ヒンドゥー教のカースト体系の中での手仕事の価値を高めるという意味も持っている。ブラーマンのような上位カーストは頭脳を使う者とされ、それに対して鍛冶屋のような職人カーストは低いカーストとして位置づけられ、そこには頭と手仕事という分断されたヒエラルキーが存在し、低カーストの社会的進出を妨げる要因にもなっている。ムラバリ村のアートプロジェクトの活動の中心を担っているのは低位の職人カーストである。プロジェクトのコーディネーターもそうした下位カースト出身の教員である。

数年にわたり、彼と一緒にムラバリ村でのアートプロジェクトを進めてきたが、教員として教育に対しての理解が深いだけではなく、他の上位カースト出身の教員に比べて、手仕事の重要性を抜きにしては語れないアートの本質というものを生来的に理解しているように見える。彼の教員としての資質に加え、アートについての理解、そして自分の村の生活を向上させたいという強い思いと努力によって、このアートプロジェクトを継続することができているといっても過言ではない。

実際にウコン染めやアボカド植樹により、アートプロジェクトの成果を目に見える形に実現できているので、ムラバリ村でアートプロジェクトが浸透するのに伴い、村人の間で彼を含めた低位カーストに対する見方や評価が変わってきているのは事実である。2023年4月の現地調査のときには、英国の大学の女性研究者とイタリアの女性アーティストも参加したが、村の女性たち主導による野外昼食会が開かれることになった。昼食会といっても丘の上で女性たちが材料を持ち寄り、調理するわけであるが、その主役は低位カーストに属する女性たちであった。通常であれば、この村でも上位カーストに属する者は低カーストの調理したものを口にしない傾向がある。ところが、この昼食会は下位カーストと上位カースト両方の女性たちの協力によって実現し、一緒に食事をするようになった。

これまでの食生活に関する禁忌が破られたのは、アートプロジェクトが下位カースト中心に進められてきたものであっても、私のような日本人だけではなく、英国やイタリアの女性たちからも大きく評価されているということを目の当たりにしたからだといえよう。さらに付け加えるならば、先述したように経済的困難さから多くの成人男性が出稼ぎのために村を離れざるを得ない状況の中で女性たち同士がカーストの違いにこだわらず協力しなければならない状況にあるということもその背景にある。

アートプロジェクトは手仕事に携わる下位カーストへの見方を変えただけではなく、ウコン染めにしても女性たちが担っているわけであり、女性に対するジェンダー的見方も変えつつある。SDGsの目標においてもジェンダーも含めた差別に対する平等を求めている。その意味においてもアートプロジェクトは村の持続可能な発展を目指す上で大きな意義を持っている。

村人たちは継続してきたアートプロジェクトへの参加経験から、アート活動を持続可能な村の発展に結びつける可能性について理解できているように思われた。芸術教育という視点からも村の子どもたちも壁画や自然素材を使った造形的な活動への強い関心が見られ、村の学校の教員もアートを通して子どもたちの創造性を伸ばすという教育的意義を理解できるようになり、こうした活動を継続的に行うことを望んでいることがわかった。

2023年秋には古河街角美術館における「境界を超えるアート」という企画展でアートプロジェクトの一部を紹介するためにムラバリ村で制作されたハートコインや村の女性たちによるウコン染めの布などを展示した。ネパールの村でのアートプロジェクトを地方の美術館とつなぐことは生活に根差したアート本来の意義を再認識できる貴重な機会となった。

この企画展の成果の還元も含めて2023年12月のムラバリ村再訪により、これまでのアートプロジェクトを総括し、村全体をアートビレッジとして観光資源としても活性化していくという計画を具体化することができた。

本研究の持続可能な村落開発につながる「社会関与型アート」プロジェクトのモデルをアートという概念さえ存在しない地域において自然や暮らしに根差したアート本来の姿を再生する試みとして提示するという目的は十分に達成できたといえる。



写真 村の集会所の壁画



写真② 竹とウコン染めの布で作られた「第三のパラダイス」のシンボル



写真 自然の土を用いた壁画

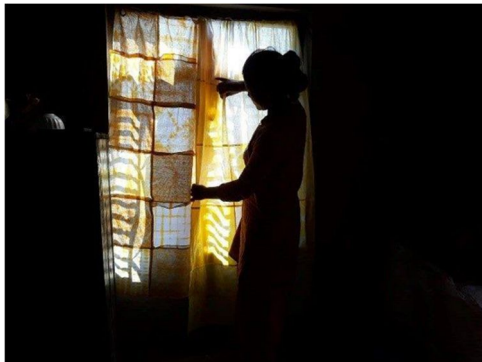


写真 ウコン染めのカーテン



写真 ハートのデザインのコイン

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金田卓也	4. 巻 20
2. 論文標題 道具を使ってものを作る活動の意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子どもと発育発達	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田卓也	4. 巻 6
2. 論文標題 人と人とを繋ぐアートプロジェクト Hearts for the Earth Project	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 こども総合研究	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田卓也・村田訓吉	4. 巻 No.151
2. 論文標題 ネパール・アートビレッジ・プロジェクト	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 美術運動	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金田卓也
2. 発表標題 Art for the Earth 持続可能な世界へ向けてのアートプロジェクト
3. 学会等名 美術教育研究会第27回研究大会（東京藝術大学）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金田卓也
2. 発表標題 社会関与型アートプロジェクトと美術教育
3. 学会等名 美術教育研究会第26回研究大会（東京藝術大学）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金田卓也/ リラ・パハドゥール・ビシュワカルマ
2. 発表標題 持続可能な発展を目指すアートプロジェクト
3. 学会等名 日本ホリスティック教育/ ケア学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関